2018 年 7 月 27 日号
リスクフラッシュ 270 号(第 9 巻 第 5 号)
Risk Flash No.270(Vol.9 No.5)
発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
発行責任者：リスク研究センター長　近藤豊将

□　第 2 回データサイエンス教育研究センター・リスク研究センター共催セミナー：近藤豊将・Page1-2
□　第 3 回リスク研究センター主催応用経済学セミナー：得田雅章・・・・・・Page3-4
□　ディスカッションペーパー発行(A-31)のご案内：酒井泰弘　・・・・・・・Page5-6
□　リスク研究センター事務局よりお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・Page7-8

第 2 回データサイエンス教育研究センター・リスク研究センター共催セミナー
山田　功　氏(東京工業大学　工学院　情報通信系　教授)

日　時:平成 30 年 5 月 31 日(木)16:10～17:10

会　場:滋賀大学　彦根キャンパス　セミナー室 I（士魂商才館 3F）

演　題:『階層構造を持つ凸最適化とデータサイエンスへの応用について』

講　師　：　山田　功　　氏（東京工業大学　工学院　情報通信系　教授）

講師紹介

山田功氏は筑波大学第三学群情報工学卒業、東京工業大学大学院理工学研究科を修了。工学博士。東京工業大学大学院教授。専門は、信号処理、機械学習、最適化、逆問題など。the hybrid steepest descent method を開発・提唱し、海外でも頻繁に論文が引用されている。IEEE Transactions on Signal and Information Processing など、一流ジャーナルの Editorial Board Member を務めている。著書に『工学のための関数解析』(新世社)がある。

セミナー概要

今回のセミナーはリスク研究センターとデータサイエンス(DS)教育研究センターの共催として行われた。講師は、東京工業大学の山田功先生である。山田先生はご専門の分野で国際的に活躍されている碩学なのだが、経済学や統計学畑の人間とは、これまではあまり接点がなかったそうである。私が山田先生の名を知ったのは、その著書『工学のための関数解析』を通じてである。数学者が著した関数解析学の書物は難解なものが多いが、同書は工学や経済学畑の人にもフレンドリーで、それでいて研究の最前線に突入するのに十分な内容が盛られている。そこで調べてみたところ、大変に生産的で精力的に研究を行っている方だったので、ぜひ本学でのセミナーをお願いしたいとと願い、今回、実現の運びとなった。

セミナーでも話が出たのだが、山田先生がご専門としておられる凸最適化、逆問題、信号処理などの分野では、工学者だけでなく、一流数学者なども参入しており、分野の健全な発展が促されているという。例えば、(数学のノーベル賞といわれる)フィールズ賞を受賞したフランスの至宝 Pierre-Louis Lions 教授もその一人である。この方はもともと偏微分方程式の理論を専門とされていたようだが、その後、階層構造を持つ凸最適化問題などでも仕事をされ、さらには経済学の論文も書いている超人である。“文理融合”というのは口で言うだけなら簡単だが、異分野の人たちが真に問題意識を共有し、本気で協業しないと新しい学問は生まれない。今回の報告があった分野は、希少かつ貴重な成功例なのだろう。

文責：ファイナンス学科教授　近藤豊将(あつまさ)

第３回リスク研究センター主催応用経済学セミナー
敦賀　貴之　氏（大阪大学社会経済研究所　教授）

日　時：平成 30 年 6 月 14 日(木)16:10～17:10
会　場：滋賀大学　彦根キャンパス　セミナー室Ⅰ（士魂商才館 3F）
演　題：『ヘリコプターマネーと財政政策の実施ラグ』
講　師：敦賀　貴之　氏（大阪大学社会経済研究所　教授）

【講演概要】

敦賀貴之氏はご専門が金融・財政論、理論経済学であり、今回はマクロ経済学のメインストリームで使用される「ニューケインジアンモデル」をベースにした分析とその意義を披露していただきました。日銀による 2%インフレ目標達成が足踏みしている現況にあって、ヘリコプターマネー（money-financed fiscal stimulus、以下ヘリマネと略記）という政策は、ワイルドカードとして、特に 2016 年秋の日銀による「総括的検証」時に注目されたことが記憶に新しいでしょう。

講演では、最初にヘリマネを定義づけたうえで、日本の状況認識や海外の先行研究を概説頂きました。Gali(2017)による結論を引用され、ヘリマネは「GDP 増加」「マイルドなインフレ」「政府債務比率低下」「経済厚生の改善」等多くのメリットがあり、少なくとも一部研究者が唾棄するような政策ではないことを強調されました。そのうえで、これまでの分析に欠けていた「政策実施ラグ」に注目し、このラグを取り入れた分析を進めることになります。

以降はモデルの分析に則した解説をして頂きました。モデルの説明には、インパルス反応の図を紹介しつつ、経済変数間のダイナミクスが明瞭となるよう工夫されていました。ラグなし・あり、定常時・不況時、2 種の貨幣需要関数（CIA、MIU）の経済効果をそれぞれ検証し、有効な政策足りえる条件を明示したことが大きな貢献といえるでしょう。

いわゆる主流派経済学のマクロモデルの中からマネーがネグレクトされて久しく、貨幣論を勉強してきた身としては肩身が狭く感じていましたが、氏の論文にあるように貨幣需要関数の役割が再びフィーチャーされ､心強い思いで拝聴させて頂きました。

一方で、氏が先行研究として挙げられた Turner 氏は、バンキングセクターによる信用創造も重要視すべきと主張しています。この点に注目し、モデルの mt のパスが変わるとすれば、また違ったインプリケーションがあるのかとも感じました。

本報告で用いた分析手法は大きな訴求力を有し、フロアの学生諸君にも魅力的に感じたものと思います。ただし、同様の分析を効率的に実施するには、MATLAB & Dynare のようなソフトを用意した上で、ニューケインジアンモデルの前提となるラムゼイモデルや RBC モデルの理解が必要でしょう。さらには、固有値分解を含めた行列計算のスキルをもってフォーワードルッキングな経済モデルの解法にも通じていなければならない。こうした点については、本学教育体制の課題になるものと感じました。

氏には、参加者に学生（学部・院生含む）が多いということもあり、わかりやすいハンドアウトを用意頂きました。さらに、フロアからの質問につきましても、モデルに則り的確にお応え頂けたことに、進行役としてありがたく感じました。

最後に、私にとって氏は直接ご指導を賜ったことはないものの、同じ大学院研究室に所属していた兄弟子にあたる方でした。一昨年前の新谷先生講演時にも同席頂き、本センターとしても大変お世話になってきた方でもあります。数多くの政府機関や大学での勤務をご経験されてこられ、懇親会ではその時折の興味深いお話を拝聴でき、大変有意義な一日となりました。

文責：経済学科教授　得田雅章

ディスカッションペーパーA-31号発行のご案内

リスク研究センターより、ディスカッションペーパーA-31号を発行しました。

Daniel Ellsberg on J.M. Keynes and F.H. Knight: Risk, Ambiguity and Uncertainty

－和訳：ダニエル・エルスバーグによる　リスク、曖昧性および不確実性の理論：J.M.ケインズおよびF.H.ナイトとの関係－

CRR Discussion Paper No. A-31

滋賀大学名誉教授　　酒井　泰弘

【研究背景】

ダニエル・エルズバーグ(Daniel Ellsberg, 1931~　)は、一面において、曖昧性と多様性の両面を研究した「稀代の才子」である。だが他面において、彼はまた、1960年代から70年代の激動時代に米国留学した私自身にとって、まさに「謎めいた風雲児」でもあった。

かの大恐慌の真最中にユダヤ人の子として生まれたエルズバーグは、1962年に母校ハーバード大学から経済学博士の学位を獲得している。学位論文のタイトルは「リスク、曖昧性および意思決定」(Risk, Ambiguity and Decision)という野心的なものだったが、そのエッセンスは、すでに前年の1961年に一流学術雑誌Quarterly Journal of Economicsに掲載されていた。このように、1960年からの数年間、彼の学問的業績は実に顕著なものがあった。だが、当時の米国社会を分断する「ベトナム戦争」とその後遺症のために、彼自身が「ペンタゴン文書事件」(Pentagon Papers Scandal)に激しく巻き込まれた結果、彼の研究業績のほうは殆んど忘却の淵に投げ捨てられてしまった。ところが驚くなかれ、彼は1990年以降今日に至るまで、物の見事な復活劇を演じているのだ。

エルスバーグは「永遠の快男児」である。彼の発見した「エルズバーグ・パラドックス」は近時において「再発見」され、曖昧性と不確実性の経済学の分野において、最もホットな研究テーマの一つになっている。「生命は短し、されど学問は長し」なのである。

【要　約】

本稿の目的は、異才ダニエル・エルズバーグによる曖昧性と意思決定の理論を多面的に吟味するとともに、二人の巨人―J.M.ケインズとF.H.ナイト―との関係について注意深い検討を加えることである。

サミュエルソンとともに現代経済学の繁栄を支えた巨星アローはかつて、何時もは温厚な彼らしくなく、ナイトの不確実性論を厳しく批判したことがある。だが、頑固者のナイトはさながら「柳に風」の風情で、「測定可能なリスク」と「測定不可能な不確実性」との間の区別を死ぬ迄堅持していた。わがエルズバーグはナイトの所説のほうに同情的であり、独自の「曖昧性理論」(theory of ambiguity)を積極的に展開していった。

まず、エルズバーグはベルヌイ＝ノイマン流の伝統的な「期待効用理論」(expected utility theory)に基づく合理的意思決定理論に対して、勇敢なる反旗を掲げようとした。これが後に彼自身による「曖昧性下における意思決定問題」(decision making under ambiguity)へと発展する形をとるのである。ところが、「事実は小説より奇なり」であって、元祖ケインズによって、エルズバーグ論文より既に 40 年前に、同様な問題提起が『蓋然性の理論』(A Treatise on Probability)の中で行われていた（不思議なるかな、エルズバーグは此の点をハッキリ言及していないのだ！）エルズバーグは彼独自の「三色の玉入りの壺の問題」(the three-color urn problem)を提示するとともに、人の曖昧性回避行動の中で、いわゆる「選好の逆転現象」が発生することを見事に示した。人はボヤットした曖昧性を避け、確実性事象のほうに心が動くわけである（詳しいことは、本稿を読んでいただきたい）。

人間は「謎解きの好きな動物」である。いわゆる「エルズバーグのパラドックス」を解くために、数々の方策が考えられよう。我々の見るところ、次のような二案が非常に有力である。第一の方策は、元祖ケインズによる「区間確率アプローチ」(interval probability approach)であり、最も簡単明瞭なものとして、私自身も近時積極的に推奨している。第二の方策は、最新の「ショケ期待効用アプローチ」(Choquet expected utility approach)であり、数学的に極めて高度であるものの、簡明さにやや欠けるものである。ともあれ、「シンプルこそベスト！」と深く信じている。

考えてみれば、エルズバーグの激しい葛藤の歴史は、損得勘定一辺倒の「イーコン族」(Econs)と、知識が不完全なために間違いを平気で犯す「ヒューマン族」(Humans)との間の長く果てしなき闘争を反映しているのかもしれない。私自身は「数学大好き人間」ではあるが、「数学万能主義の人間」ではないのだ。だから、エルズバーグとともに「ヒューマン族」の一員として、曖昧性下の意思決定の問題に限りない親近感を覚えている。まさに、「第二、第三のエルズバーグ」が颯爽と登場することを祈るばかりである。

上記ディスカッションペーパーは、リスク研究センターホームページのディスカッションペーパーサイト

https://www.econ.shiga-u.ac.jp/risk/10/2/3/8.html でもご覧頂けます。

尚、冊子体をご希望の方は、メールにてリスク研究センター事務局までご連絡ください。

リスク研究センター事務局よりお知らせ

セミナー開催予定のご案内

リスク研究センターでは、秋学期も研究セミナーを開催予定です。
詳細が決まり次第、随時発信をさせていただきます。
◆セミナーは学内外、学部生、院生を問わず参加を歓迎します。

平成 30 年 10 月 18 日(木)･･･【表題後報】
日引　聡　氏(国立環境研究所　社会環境システム研究センター／連携研究グループ長
東北大学大学院経済学研究科　教授)

平成 30 年 11 月 1 日(木)･･･会計教育研究セミナー『会計教育研究の最新動向』
菅原　智　氏　(関西学院大学商学部/商学研究科　教授)

平成 30 年 11 月 15 日(木)･･･【表題後報】
中林　純　氏(近畿大学経済学部 経済学科 / 経済学研究科　准教授)

平成 30 年 11 月 29 日(木)･･【表題後報】
和泉　潔　氏(東京大学大学院工学系研究科 システム創成学専攻　教授)
・データサイエンス教育研究センターとの共催セミナーになります。

平成 30 年 12 月 13 日(木)･･･【表題後報】
Gilles Dufrénot　氏(Aix-Marseille University　教授)

平成 30 年 12 月 15 日(土)～16 日(日)･･･
The 14th International Conference on Asian Financial Markets and Economic Development
Financial Issues on Asian Countries and Markets jointly organizing the 2nd Risk in Economics and Society, Shiga University　※京都市内にて開催予定。
滋賀大学、長崎大学、西南財経大学との共催となっております。

平成 31 年 1 月 17 日(木)･･･【表題後報】
堀　健夫氏（東京工業大学 工学院 経営工学系　准教授）

Facebook ページでも随時更新中です！
いいね！・フォローお願いいたします。

ディスカッションペーパー掲示スペースのご案内

リスク研究センター入口のスペースに過去発行したディスカッションペーパーを一部置かせていただいています。ご自由にお取り下さい。
一覧を掲示しておりますので、ご希望の冊子体がございましたら、オーダーシートを置かせて頂いていますので、NO,・冊数・メールアドレスをご記入の上リスク研究センター前 BOX に投函してください。
（従来通りメールでも受付しております）

こちらでも一覧を確認していただけます。
https://www.econ.shiga-u.ac.jp/risk/10/2/3/

夏季一斉休業のお知らせ

平成 30 年 8 月 13 日(月)～8 月 15 日(水)

滋賀大学では、平成 30 年 8 月 13 日（月）～8 月 15 日（水）まで、全部局におきまして、夏季一斉休業を実施いたします。
ご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】
1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

【サービスの変更・中止・登録削除】
1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量が一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】
1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】
1. 配信メールが回線上の問題（メールの遅延，消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】
1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変して blog 等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。
（ https://www.econ.shiga-u.ac.jp/risk/10/2/3/12.html）

発行：滋賀大学経済学部　附属リスク研究センター
編集委員：近藤豊将、得田雅章、石井利江子、野田昭宏、菊池健太郎
松下京平、井澤龍、清水昌平
事務補佐員：山﨑真理
滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局（Office Hours:**月ー金** 10:00-17:00）
〒522-8522　滋賀県彦根市馬場 1-1-1　　TEL:0749-27-1404　FAX:0749-27-1189
e-mail:　risk@biwako.shiga-u.ac.jp
Web　page : **https://www.econ.shiga-u.ac.jp/risk/**